

ニュース英語と私

藤井章雄

(早稲田大学)

「ニュース英語」と私との付き合いは40数年になります。特に「放送ニュース英語」との付き合いであります。3つの異なった立場から、この「放送ニュース英語」と取り組んでまいりました。「送り手」「受け手」そして「研究者」という立場であります。今日は主として、「送り手時代」の仕事内容を振り返り、そのコミュニケーション上の問題点を改めて考えてみたいと思います。

送り手としては、1960年代に短波による海外向け放送を行うNHK国際局（現在の国際放送局）の英語ニュース担当レギュラー・スタッフとして活動し、さらに、1970年代の初期にはNHK国内総合テレビ・ニュースの日英2か国語実験放送に嘱託スタッフとして参加しました。随分昔の経験ですが、その仕事内容は現在でも大筋において変わりがないようですので、それなりの意義があると思います。

私のジャーナリストとしての現役時代は、一口で言うなら、「門番」の仕事を終始おこなっていたように思います。英語では“gatekeeper”と申します。米国で最初にgatekeeperの機能について論じたのはKurt LevinやDavid Whiteであったようです。主として彼らはジャーナリスト（特に新聞社のデスク）が「受け手」に情報を流すプロセスにおいて、情報量の統制を行っていることを指摘したようです。アメリカにおけるその後の研究を見ても、gatekeeperの機能に関しては「情報量の統制」を強く指摘しているように思われます。

私のNHK国際局における仕事には、まず、海外ニュースの作成という業務があり、主として、外国の通信社からの英文情報、及びNHKの特派員情報と日本の通信社による日本語情報に基づいて放送英語ニュースを書きました。通信社の情報は数千語に及ぶこともあり、これらの情報を基に、わずか数十語から100語を少し上回る程度の簡潔なニュースにまとめる仕事でしたから、まさに、メッセージ（情報）の量を統制する仕事でした。何を捨てて何を取るかが最も重要な課題でした。さらに、私が常に意識したことは、Radio Japanとして何を報じるかということでした。換言すれば、Radio Japanの聴取者は何を知りたがっているかを常に頭に入れて仕事をする必要がありました。当時の世界、特にアジアには権威主義国家（つまり、言論統制が行われている国）が多かった事実を常に認識しておく必要がありました。さらに私が意識したことは、放送英語ニュースへの語法上の書き換えが適切に行われているか、ということでした。具体的には、“One sentence, one idea”の原則が守られているか、耳から伝えられるニュースとして「流れ」が導かれているか、数字や略語が適切に扱われているか、専門語がお茶の間の言葉に書き換えられているか、などが毎日の課題でありました。

次に私がニュース現場で遂行した別の業務は、主として国内の日本語情報に基づく英語ニュースの作成という仕事でありました。この和英ニュース翻訳・作成プロセスにおいて

も情報の統制という gatekeeper 機能が要求されました。日本語の細かい情報をあれもこれも入れますと放送英語ニュースから「明快さ」が奪われてしまうからです。しかしながら、単なる情報の統制だけでは不十分であることにも気づきました。日英両言語ともに、ストレート・ニュースは逆ピラミッド型で書かれるのですが、微妙な違いがあることを認識したからです。つまり、日本語のニュースは、日本語の文章そのものがピラミッド型であるため、重要ポイントが文尾や段落の最後にくることが極めて多いのです。ただ、記事全体を見ますと、逆ピラミッド型で報じられているのであります。一方、英文ニュースでは文頭に最重要ポイントが報じられ、順次第2重要ポイント、第3重要ポイントと伝える逆ピラミッド型であり、直訳的な翻訳では英文ニュースとはならないのであります。この作業で痛感したことは、「文化の違い」を考慮しない限り明快な英文ニュースを作成できないという事実でありました。

Edward Hall の名著 *The Silent Language* には、culture とは “the way of life of a people, the sum of their learned behavior patterns, attitudes, and material things” であるとする定義が紹介されていますが、「文化」に関連して私が特に注目しておきたいのは “institution” という言葉であります。S. I. Hayakawa は、*Language in Thought and Action* の中で、institution とは、“an organized pattern of group behavior, well-established and accepted as a fundamental part of a culture” であるとする社会学上の定義を紹介し、さらに「人々がひとたびこの institution になじんでしまうと、結局、自分たちの慣習が “the only right and proper way of doing things” であると感じるようになる」と指摘しているのであります。私は、新聞、放送を問わず、長年にわたって築き上げられてきた「ニュース英語」、及び「ニュース日本語」の報道スタイルも、Hayakawa の指摘する institutions のひとつとみなすことができると思います。しかもこの「報道慣習」はニュース現場で働く人々のみならず、その読者や視聴者などの「受け手」もその慣習を “the only right and proper way of reporting” であると感じ広く受け入れてきた、と見るのが妥当ではないかと思われまます。したがって、ニュース翻訳者が、英日、日英を問わず、その「訳文」をそれぞれの言語文化としての報道慣習に適合させる必要があるのです。

ニュース翻訳をこのような異文化間コミュニケーション作業のひとつとして捉えた場合、私が最も痛切に感じたことは、順序の再編成という作業の必要性でありました。日本語自体がピラミッド型でコミュニケーションされるという特性のため、ニュースのリードにおいても、状況説明から入って、重要ポイントが文尾で報じられるのであります。記事全体を見ても、全体としては「逆ピラミッド型」であるが、個々の文、段落はピラミッド型であります。ニュース現場で日本語記事に基づいて英語ニュースを作成する場合は、日本人以外の受け手を対象にする訳ですから、センテンスやパラグラフ・レベルにおける順序の再編成に留まらず、記事全体の構成を根本から編成し直すこともありました。極端なケースでは日本語記事の最後の段落における情報を、英語ニュースでは記事の文頭にもつてくることもありまます。日本語ニュース資料に基づく英語ニュース作成プロセスにおいては、メッセージの統制とともに、メッセージの順序の再編成が gatekeeper 機能の大きな位置を占めていると指摘しておきたいと思ひます。

「門番」の仕事を想像してみましても、例えば、10人までなら門を通過してよいがそれ以上は駄目、というように人数の制限を行うこともあるでしょうし、さらに、A,B,C 順に並ぶのは駄目で「アイウエオ」順に並ぶように命じるなど「順序の再編成」を行うかも知れません。ところが、「門番」は、さらに、入場希望者に対して身なりを変えるよう要求したり、

人数を増やすよう要求するかも知れません。これを日本語情報に基づいて英語ニュースを作成するプロセスに当てはめると、「メッセージの変容と補足」という gatekeeper 機能が考えられるのであります。

さて、私自身が現役時代に作成した放送英語ニュースは「音」とともに消えてしまって、今は残っていません。当時の私が参照した日本語情報も同様に残っていません。しかし、メッセージの変容と補足に関連して当時の Radio Japan のスタッフが行っていたと記憶しているメッセージ操作、あるいは、Radio Japan にとってもかなり参考になると思われるメッセージ操作が、私が長年モニターした海外メディアによるニュースに数多く見られるような気がします。報道慣習の違いを提示するのが容易な語句単位のを少しご紹介したいと思います。海外の「受け手」の理解を容易にするために必要と思われるメッセージ操作ばかりであります。

まず、「変容」についてですが、日本語、英語メディアも報道慣習の違いのため、機械的に変容させられているのが「日付」の報じ方でしょう。日本語メディアによる月日の日付が、英語メディアでは曜日に移し換えられているのです。英語ニュースでは、一般に事件発生の前後あわせて2週間以内の日付を報じる場合には、普通、曜日で表現される慣習ですから、その必要性が生じるのです。

台風報道に関する慣習の違いも、変容をもたらします。ご存知のように、気象庁では毎年1月1日以降最も早く発生した台風を1号とし、以後台風の発生順に番号をつけていますが、台風は別の名前も持っているのです。国際向けの気象通報では、2000年の台風1号からアジアにふさわしい名前「アジア名」で呼ぶことにしているようです。たとえば、2004年の10月に日本を襲った「台風23号」は、英語メディアでは“Typhoon Tokage”と報じられていました。

裁判報道のケースも慣習が少し異なるようです。日本語メディアは「那覇地裁」のように裁判所名を必ず報じる慣習ですが、英語メディアはあまり裁判所名を報じず、例えば“a judge in Tokyo”あるいは“a court in Japan”のみですませたり、“a panel of judges”で表現することが多いようです。

他に、株価報道に関する日英両言語の違いも変容をもたらします。慣習として、日本語メディアは「日経平均」を金銭表示で伝えますが、放送に限らず、英語メディアはポイント表示で伝えるのです。「変容」操作に関してちょっと問題をはらむのが、「自衛隊」をどのように報じるかではないかと思えます。VOA や BBC World Service などの海外メディアは、日本政府が発表している正式英文名称である Japan Self-Defense Forces を採用することはむしろ稀で、“Japan's military forces”とか“Japanese troops”と報じています。陸上自衛隊なら“ground troops”ですし、航空自衛隊機なら“Japanese Air Force jets”あるいは“Japanese warplanes”と報じられています。海上自衛隊の場合はほぼりと“Japanese Navy”と伝えられています。言うまでもなく、海外のメディアは、Japan Self-Defense Forces という表現では、実質的に軍隊である自衛隊の実態を、誤解なく伝えるのは無理であると判断しての処置と思われれます。たしかに、“Self-Defense Forces”では意味が曖昧で、「自警団」のような組織と解釈される危険があると判断されているのかもしれない。しかし、日本のメディアがそれを報じる場合、海外メディアのように報じてよいものかどうか論議を呼ぶ可能性があります。しかし、海外の「受け手」の大多数が“Japan Self-Defense Forces”ではその実態を理解するのが困難とすれば、正式名称になんらかの説明を加える必要があるかも知れません。

さらに、日本の事情に詳しくない海外の「受け手」には、ただ簡潔に報じるだけでは分かりやすいニュースとはならないこともしばしばあります。そこで「メッセージの補足」が要求されるのです。その代表的な一例は、何と言っても「北方領土」でしょう。英語ニュースでは“four northern islands”と言い換えたとしても不十分でしょう。海外のメディアもいろいろ苦心しているようです。たとえば、“four northern islands occupied (by Russia) since 1945 and claimed by Japan”とか“four disputed Kuril islands north of Japan”の直後に“The Soviet Union has held the islands since the end of World War II. And they are the main issue holding up a peace treaty between the two countries.”という独立した一文を補っているケースもあります。それ以外にも、「尖閣諸島」やあまり知られていない人物や組織などにもなんらかの「補足」が要求されるのです。

さて、英語ニュース作成者が、個人及び組織として、メッセージの統制、メッセージの順序の再編成、メッセージの変容と補足という gatekeeper 機能を遂行していることを指摘しましたが、私の現役時代には編集者としての業務もありました。編集作業では、担当する時間のニュース放送用に、すでに作成されている数多くのニュースの中から適当なものを選び出し、順位をつけて並べ換え、ヘッドライン（主な項目）を書き、それを担当アナウンサーに手渡すという仕事でしたが、ここでも gatekeeper 機能が要求されました。まず、英語ニュース班によってその日（あるいは前日）に作成されている数多くのニュースの中から、限られた数のニュースを選び出し、すでに他の放送時間でオン・エアされているものについては、中身を大きく削除する必要がありましたし、ニュース項目の順序も放送時間や放送対象地域により再編成する必要がありました。

最後に、「送り手」によるこのような gatekeeper としてのメッセージ操作を導く要因のひとつとして、フィードバックを挙げたいと思います。Wilbur Schramm は、*The Science of Human Communication* の中で、“By feedback, we mean information that comes back from the receiver to the sender and tells him how well he is doing.”と指摘していますが、新聞社なら数多くの手紙などを受け取るでしょうし、国内放送局の場合も視聴者からの反響にさらされるのです。これらのフィードバックが「送り手」に影響を与え、「送り手」は次のメッセージの改善を志向するわけです。ところが、国際放送の場合、このフィードバックが意外に少ないのです。私の現役時代は fax やインターネットなどが普及していない時代でしたから、海外からのフィードバックは航空便に限定されていました。それもかなり時間が経過してからであったと記憶しています。

国際放送のようにフィードバックにあまり恵まれない「送り手」に対しては、それを補う方策のひとつとして、私の個人的体験に基づくささやかな提案をしたいと思います。それは「送り手が、時々、受け手として“role-taking”すること」なのであります。つまり、送り手が暇を見つけて受け手を経験することを強く提案したいのであります。私は現役時代に「多忙を理由に」Radio Japan のニュースをあまり聞こうとしませんでした。また、BBC World Service や VOA のニュースに耳を傾ける習慣も持っていませんでした。今でも後悔しています。その習慣を確立したのは現役を終えて早稲田に来てからであります。どのようなニュースが分かりやすいか、あるいは、分かりにくいかなどを容易に知ることができるのであります。さらに、日本人のように英語を母語としない送り手にとって、英語を母語とするメディアによるコミュニケーション法を学ぶことは計り知れない程のプラスとなるのであります。